零れゆく雫

ナナシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零れゆく雫

【Ｎコード】
Ｎ０５７５Ｄ

【作者名】
ナナシキ

【あらすじ】
穂川一絵は「優しくて、気立ての良いお姉ちゃん」だと皆から思われ、皆から好かれている。皆は彼女を中心として、ずーと幸せが続くと信じてた。なのに、そんな彼女が彼氏に振られた！？あんなに仲の良い、皆がうらやむカップルだったのに！？

「私じゃダメなの？何がいけないの？」

「僕では君には合わないよ」

必死に女は、、穂川一絵は追いすがろうとする

が、

男はかぶりを振り、背を向けて、去っていこうとする。

一絵は必死に手を伸ばす。だが、伸ばした手は虚空をきった。

（待って、置いてかないで・・）

一絵は必死に追いかける

だか、いくら走っても追いつくどころか相手はどんどん離れていく。

焦燥にかられながらも体は重く、思うように動いてくれない。

ただ呼吸音だけが響きわたり、男の姿は小さくなっていく。

（待っ・・・・・　・　・　て、

ってゆ――とるやろうがぁあああ！！！」

カバッと布団をめくり上げ、おもっきり口を開いたままの姿勢で一絵は、しばらく固まっていた。

（・　・　・・？ここどこ？）

「一絵！静かにしなさい！！」
一絵の母、籐子が非難の声をあげる
（ん？母さん？
・・・
・　・　・　ああ夢か）
どうやらさっきのは夢だったようだ。
それもそのはず、一絵が彼氏にふられたのは昨日のことだ。
その後、どうやって家に帰ったのかも覚えていない。

「茂、、、」一絵は元彼の名をそっとつぶやき、枕を抱き寄せた。

＊＊＊＊＊＊＊

「よくやるよ」
姉の隣の部屋で、一絵の弟、祐一はつぶやいた。
（どうせ、姉貴はあれだけのことをやっといて、何も覚えていないのだ。）
祐一は昨日のことを思い出して、身震いをした。

姉がああなる事はめったに無いが、前の時もトラウマとして祐一に刻み込まれている。
（アレは、、、ダメだ。ダメだ・・・）
（忘れよう、できるだけ早く）

（早く忘れさせてくれ！！！）
顔は青ざめ、力なく祐一は枕を抱き寄せた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さかのぼること昨日、
祐一は友達の木元と坂下とで遊びに出かけていた。

この日は土曜日、
天気はいいし、何ぶん、力のあまってる高校2年の3人にとって、遊びに行こうとなるのは自然の流れだった。
そして、2時に駅で待ち合わせて、今合流したところだ。
ちなみに2時集合だというのに木元は遅れてきた。
坂下は家が一番遠い上、部活しても一番乗りなのにだ。

どうやら昨晩、教頭の頭はズラか、そうじゃないか気になって、結局寝る時間が遅くなって、
「あ～、いままで寝てた～」らしい。
木元はいいやつで、憎めない奴なのだが、
天然なのだ！

「やっぱりあれはヅラだよ、化学教師はハゲげやすいっていうし」
「そうなのか？」
「薬品をよく扱うから、と聞いたことあるがデマだろ？」
「そんなことないあれは絶対ヅラだ～」
「どっちかって～と英語の・・」
などと話ながら3人は街をブラブラしていた。

祐一は可も不可も無い普通の少年といった感じだ。部活はサッカーをやっている。
坂下はお調子者だが、バスケをやっているだけあって背が高く、細いがしっかりした印象を受ける。
木元は人当たりがよく、おっとりとした少年だ。部活は入っていないが、生徒会の書記をしている。

そしていつも、生徒会室で会員と集まって遊んでいるらしい。

「ん？」

「どうした～祐一～？」

「あっちになんかあんのか？」

祐一の視線の先には公園があった。

もっとよく見ると

「あそこにいるの祐一のお姉ちゃんだよね？」

と木元。

天然なのだが、案外見てるとこは見てる。

「えっどれ？どれ？」一人分かってない坂下。

少し哀れ。

この公園は大きく、いつも人で賑わっている。

そんな公園の噴水近くに一絵はいた。

彼女には可憐と言う表現が似合うだろう。優しく、しなやかなイメ

ージがする女性だ。
今日は淡い色のワンピースに身を包んでいる。
しかし解せない。
今日は朝から彼氏とデートしているはずだ。
なのに彼女は一人でいる。
公園のすみのベンチで、一絵はまぶたをふせ、俯いている。

「お、アレ・・とか？」
見当はずれを指す坂下。
寂しい奴。

坂下は木元に教えられてやっとどれか分かったようだ。
「ちょっと声かけて見ようぜ」
どうやらやっと仲間に入れたので、名誉挽回しようとしているらしい。
（そういや～姉貴の彼氏ってどんなんだろ？
姉貴はあれでも結構しっかりしているから、相手もかなりしっかりしてるんだろ～な）
などと、祐一がひとりごちてる間に坂下達は一絵に接近していた。

「あっ、待てよ！」
祐一はあわてて駆け寄ろうとするが、すでに坂下が声をかけていた。
「こんちは～」
坂下は愛想よく声をかける
が、
一絵は動かない。
「？」

もう一度声をかけても反応は無し。
うん、完全に無視されてるよ。坂下君……
（さすがに下心丸見えじゃ警戒されるに決まってるだろ。ばかめ！！）
祐一は心の中で大いに笑っていた。

だが不審でもある。一絵はそういう意地の悪い奴ではなかったはずだ。
「おい、姉貴」

裕一が呼びかけても反応無し。

・・・・・・

「おい、姉貴ってば！」

不安になった祐一は、声をかけながら一絵の肩をつかんで揺さぶる。
揺さぶる！揺さぶる！
一絵は残像を残しながら、がくがく揺れる。

「どう！した！ん！だ！よ！！」

「ん？」

やっと気づいたのか、一絵は力無く顔を上げた。

だがその顔は、祐一でも見たこと無いような顔だった。
頬に涙の後が残り、髪はみだれ、顔に貼り付き、目は赤く濡れていた。

朝あれだけ張り切っておめかしやら、なにやらして出ていったときとは、似ても似つかない。

一絵はしばらくポーとした、不安そうな顔で一絵は祐一を見上げた。

「やっヤバ！」

いきなり顔を崩し、
そう言葉発したかと思うと、どかへ駆けて行った。

その様子を三人はポカーンと、動くことができずに見ていた。

＊＊＊＊＊＊＊

一絵は帰ってくるなり、
「も～いるんならいるって言いなさいよね」
と、少し怒ったように口を開いた。

すると簡潔な一言が返ってきた。

「いる」

「いや、そいうことで無くって」

「僕もいます」

「いや、違うって」
裕一と木元にキッパリと答える一絵。

「そういえば、あんた達って確か裕一の友達の～～」
と、ココで初めて坂下達の存在に気づいたのか自己紹介タイム。
顔を合わせた事はあっても、まともには話すのは初めてのであった。

「僕、木元　通です。え～と～」

「俺、坂下　健二。バスケ部のエースです」

木元の挨拶に、ここぞとばかりに割り込む坂下。できるだけ自分をアピールしときたいのだろう。
だがレギュラーなのは確かだが、エースと言うのは嘘だ。

「ん、私は穂川　一絵。一応こいつの姉ね、ヨロシク」
一絵は、一度頷いてから元気よく挨拶する。

裕一は小突かれながらも、
一絵からさっきの弱々しさが消え、元気そうに笑う姿を見て安堵した。

「一絵さんは大学生ですか？」

坂下が尋ねる。

「ＯＬをしてるよ」
一絵がにこやかに答える。
すると坂下が『うほーー』と言う声を上げ、裕一を引っつかみ遠くまで連れてった。

（何で坂下はこんなにテンションが高いのだろう？）
この時祐一は、暴走機関車に連れ去られながら思った。

「一絵さんって何歳だっけ！？」
坂下が気性荒く尋ねる。
彼にっとて女の人に直接年を聞くのはタブーらしい。

（だが女の人の前で奇行に走るのは大丈夫らしい。変な奴）
そう思いながら祐一は気だるげに答えた。

「たしか２３歳だけど」

「ふ、、フフ、フフフフフフフフフフフフッフ！！！！」

坂下は、一通り低く変な笑い声を上げたかと思うと、いきなり裕一の肩を掴んで、
「これからは、兄さんと呼ばせて下さい！！」
と、言い放った。

「誰が呼ぶか！！」
アホな一言に祐一は思わず言い返す！

「あ、そっか、俺が兄さんになるのか」

「ならん！！！」

不毛な口論を繰り広げながら、裕一は、坂下の性格をまた一つ理解した。

そして二人がアホやってる間に、木元が一絵と楽しく話をしていた。それに気づいた二人は急いで戻ってくる。その時に木下の質問が耳に入った。

「ところで、声をかけた時にどこか行かれましたが、何があったのですか？」

これは祐一も気になった。

それにしても

（際どい！！

知らないとはいえ、今頃デートしているはずの姉ちゃんに

間接的に、理由を聞くなんて！？）

祐一はむしろ気が気でなくなった。

一絵は裕一を小突きながら、笑いながらもどこか恥ずかしそうに言

った。
「いや、こいつが変な顔したから逃げちゃった」
（かわしたーーー！！？？）
小突かれながら、もう本人以上に焦ってる祐一。でも顔は無表情。
（恥じらってる姿も素敵だ）
良い笑顔でガッツポーズの坂下。
（そんなに驚いた顔したのかな？）
気楽に首をかしげる木元。
だが、どこか得心がいったようだ

「裕一が変な顔なのは元からだよ～」
さすが、木元。少しずれてる。
これは冗談でなくマジボケだろう。
「ちょっと待て木元、俺が変な顔？」
「どんな変な顔でも兄は気にしないぞ～」
「フォローになってないし、そのネタはもういい！」
いつもの調子に戻り、騒ぐ三人。
それを一絵は笑いながらしばらく眺めていたが、
頃合いを見計らってから、話し出した。

「実はさっき彼氏に振られれて沈んでたんだ！
それで、ちょっと人に見せれらないような顔になってたから、トイレへ化粧直しにに行ってたのよ。
その時顔洗ったら、なんかさっぱりしちゃった。」

一絵がはにかみながらも、清々しくカミングアウトした。
裕一はさらに無表情になり、木元はボーとする中にもとまどいが見られた。

まあ約一名は（フリー確定）と喜んで聞いていたが。

そんな3人を見ているのか、見ていないのか、
今度は満面の笑顔で、一絵は提案を投げかけた。

「そうだ。今からお姉さんのために、お別れパーティーしに行かない？」

「姉貴、ソレって意味が違わうと思うぞ」
裕一はぐったりと答えた。

だが結局は、お姉さんスマイルに押し通された。

＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊

小波和葉は困っていた。

普段彼女は、小柄ながらも元気にあふれていて、ひまわりのように
いつも周りに明るい雰囲気をバラまいている。
なのに、今日はどこかおかしい。

なんだか重い空気を醸しだしている。

その理由はと言うと、
和葉は買い物を楽しむためを街をブラブラしていた時に起こった。

なんとそこで、和葉の敬愛する先輩、穂川一絵
の彼氏である森　茂伸に出会ってしまったからだ。

彼は今頃、一絵とデートしているはずだ。なのに彼は一人でいる。
どう見てもデートしているようには見えない。

昨日、一絵から「明日茂とデートするんだ」と楽しそうに話してた
のを思い出して、
和葉は眉の間のしわをいっそう濃くした。

茂伸は和葉の大学時代からの友人だ。
彼はいわゆるイケメンであり、努力家で実直な人間だ。
だから、和葉は彼が約束を簡単に破る人間で無い事を知っていた。

（確か先輩は朝からデートのはず、でも森君は一人よね～。なぜ？なぜなの～～？？？）

和葉は茂伸の後をコソコソつけ回しながら頭を抱えた。頭の上にはクエッションマークがたくさん生えてるに違いなかった。

（はっ！まさかアレは林君の生き別れの双子の兄だとか！？）

和葉の脳内は暴走していて、今にも頭から湯気が出てきそうだ。

「おしい！正解は双子の弟なんだよ」

「わっ！！？？」

迷走している和葉の目の前に、いつの間にか茂伸はいた。

「嘘だよ。和葉ちゃんは相変わらずだね～。あれ、どうしたの？」

「え、え～と、その、、、」

「いきなり後ろで聞き覚えのある声がしたからふり返ると、和葉ちゃんでビックリしたよ、

そうだあそこで、お茶でもしようか」

和葉は、頭をプスプスいわしながら茂伸に連れて行かれた。

＊＊＊＊＊＊＊

二人は喫茶店に入り、茂伸はコーヒーを、
和葉はケーキセットを頼んだ。

そして、和葉は言いにくそうに口を開いた。
「あの～先輩はどうしたんですか？」

「ああ。一絵さんとは今日別れたんだ」

「えっ！！あんなに仲良かったのに振られたんですか？」

「いや、形としては僕が振った事になるけど、心境としてはその通りだね」

和葉には訳が分からなかった。
それでもお似合いの二人が別れた事、何より先輩が傷つく事が許せなかった。

「何で先輩を振ったんですか？
詳しく説明して下さい、愛想が尽きたなんて許しませんよ！！」

「やっぱり逆だよ」

茂伸は、弱々しく笑いながらそう言った。

そもそも茂伸と一絵は合コンで出会った。
茂伸は和葉に合コンの時に呼び出され、

そのとき一絵に一目惚れをして、猛烈にアタックした結果付き合ったのだ。

その後

「僕達はうまくいっていた。」

少なくとも周りの人間は誰もが思った。

「だけどそれは全部一絵さんのおかげだ。僕は一絵さんより一つ年上のクセして足を引っ張る事しかできかった。」

「どういう事ですか？」

「僕は一絵さんに出会ったとき、彼女がとても輝いて見えていた。一目惚れだ。
だけどこれは憧れていただけ、と言った方が正しいのかも知れない。
だから『彼女にふさわしい人間になろう』と誓い、かけずり回った。
そしたら一絵さんと付き合う事も出来きた。
ますます一絵さんを好きになって、一絵さんのためにもっとがんばったんだ。

、、、でもそうしている内に気付いてしまったんだ。
僕は一絵さんのお荷物でしかなかったことに。
僕がどんなに手を伸ばしても一絵さんには届かない

それでも

彼女は振り向いてくれる。

それはどんなに残酷な事か……」

「足手まといってなんですか？！

先輩だって完璧じゃありません。甘えたいときもあります！

それなのに、あなたは先輩を置いて逃げ出すんですか！彼氏なのに！

先輩の事が好きだったんじゃないんですか！！」

和葉は思わず叫んでしまった。コーヒーカップがガチャッと音を立てる。

だが茂伸は、そんな悲痛な和葉の意見を弱々しく笑った。それは眩しさに目を背けているようにも見えた。

「今でも好きだよ」

「じゃあ何で！」

「好きだから、僕が足かせになって彼女が弱るのは耐えられなかった。

どんなに努力しても僕じゃ、一絵さんと肩を並べる事なんて許されないんだよ。」

おそらく茂伸はまじめで一途すぎたのだろう。

一絵を想うがゆえ手を引いてしまった。

「何ですかそれは！！そんなんじゃ別れて正解です！！もういいです。失礼します！！」

和葉は飛び出すように喫茶店からでていった。

一人残された茂伸は
「僕じゃ君を幸せにする事が出来なかった。それでも、君には幸せになってほしい」
とコップを握った姿勢のまま呟く。

その手は僅かに震えていた。

＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊

一絵は周囲から才色兼備で、人望も厚いと評価が下っているが、
子供の頃、親が離婚すると言う目に遭っていた。

一絵達は母親の手に残り、
母親はいつも仕事に行っては帰って寝るような生活を送っていた。
そのせいで、家の面倒や、弟の世話は全部一絵の仕事になっていた。

そして母親がよく父親を強くののしり、酒に溺れるたびに
（私は絶対ああはならない。もっと良い、誰もがうらやむような素敵な生活を送ってやる）
そう思った。
そして同時にそういう想いを強く自分に課した。

だから彼女は常に人の二倍、三倍は努力した。
バイトをして家計を助けたのはもちろん。
時間を作っては様々な勉強をしたり、
ためになることは全部やってきた。
ただ、素敵になるために駆け抜けた。

本当は大学に行きたかったが、高校卒業後すぐに就職した。
そこでも一絵はがんばり、キャリア組でないにも関わらず、人に認められ出世していった。

そして、新入社員の和葉と出会った。
一絵は和葉の上司だったが、年が同じだからかすぐに仲良くなった。

ちなみに一絵は和葉に、
「同い年なんだから一絵で良いよ」と最初に言っていたのだが、
「いいえ、先輩は先輩です」と言いきられ、
（ま、いっか）と思い、彼女から先輩と呼ばれている。

これが彼女のイメージに合っていたので、社内でも先輩と呼ばれる事が多々ある。

そして、彼女が出世すると
母親は、負担が軽くなったのか、前より明るくなっていった。
だからか感謝こそすれ、尊敬するどころか、憎んでいた母を許せるようになっていた。

そんな頃あの合コンは開かれたのだった。
一絵は今までに付き合った男は、ことごとく振ってきた。
だが茂伸とだけはうまくいきそうな気がした。

「全てが上手くと思ったのにな」
一絵はそう呟きながら歩いていた

「いやいや、上手かったですって、姉さん次行きましょーー！」
坂下が元気に声を上げる

「そうだ姉貴ーーもっと歌うぞ！！！！」

「行っこ～～～～！！

「よし！ついてこーーい！！」

あの後、四人はカラオケに行って思いっきりはじけた。
そして妙なテンションの四人ができあがり、そいつらは街を彷徨っていた。

と、
そんなご機嫌な一絵達の目の前に、和葉がふらふらと歩いていた。

「あっれ～～和葉じゃない？こんなところで合うなんて奇遇だね！」

和葉は一絵を見つけると立ち止まり、かわいい顔をくしゃくしゃにして駆け寄ってきた。

「センパーーーーイ」

そして、そのまま一絵に抱きついた。

「よしよし、どうした？」

「先輩、私、私、、」

和葉は泣きながら何かを訴えようとしているが声にならない。

一絵はびっくりするどころか、何かを瞬時に理解して、

そんな和葉を優しく「よしよし」とあやしながら頭をなでた。

一絵があやしながら、ふと三人の存在を思い出し、困ったような目を向けた。

男三人はやっぱり固まっていた。

思いがけない場面に弱い三人である。

＊＊＊＊＊＊＊

和葉をなだめ、一通り自己紹介した後、
日が落ちた事も手伝ってか、なし崩しの形で一絵のアパートに行く事になった。

そして家に着くと
「ま、汚い所だけど、くつろいでってよ」
と、一絵はそう言い残し、奥の台所に消えていった。

部屋自体は綺麗にまとめられているが、なにせアパートが古いので、古びた感じは拭い去れない。
それでもどこか落ち着けるように工夫されているのは、一絵の手腕だろう。

母親は、仕事で出かけている。
一絵に気を利かしたのか、帰りは遅くなると、昨日祐一達に漏らしていた。

いつの間にか四人はしっかりとくつろぎ、しばらく談笑していると、一絵が鍋を持って表れる。
「た～んと食べてね」

「待ってました！」

「お、うまそ～～」

「あ、先輩手伝います」

などと声が飛び交い、楽しそうに団欒が始まった。

そしてその流れのまま酒が出てくる
勢いはどんどん加速して行き、もはやどこに向かっているのか分からなくなってきた。

「ほらテンパイ～お酒飲んれまふか～～」
和葉がとろ～んとした目で一絵に言い寄るがろれつが回ってない。
「はいはい飲んでるよ～」
「そうです～、飲んでみんな忘れるのら～私は先輩の味方れすよ～」
「く～カワイイやつめ、こうしてやる～」
一絵は和葉に抱きついてグリグリした。
「も～やめてくだらい～～」
二人はなんだかんだで、楽しそうにじゃれ合っていた。
「姉さ～ん今日は飲みましょ～」
いつの間にか坂下が一絵の呼び方が変わっていたが、一絵には別に違和感は無かった。

「あんたはちょっと飲み過ぎぎゃない？」

「姉さんが居てくれるなら、だいじょーぶでーーす」

「あはははは」

しばらくすると

もはや、人で無くなった何かしか残っていなかった。

「ふぉれは、しゅたはちゃふん、、しゅらへた〜〜」

「ふぉひはて。。ふひあえたきふら。。」

「こいちゃれ〜〜〜こ」

「にゃ〜〜」

未知の言葉で会話したかと思うといきなり二人は肩を抱き合って泣き出した。

「裕一も坂下もよくそれで通じるね〜」

坂下と裕一は顔を真っ赤にして壊れてしまった。

だが、木元一人普段と変わらず笑っている。

というか、普段から酔っているような性格だから、飲んでも分から

ないだけなのだろうか？

木元は、唯一の良心である一絵の方に寄っていった。

「あんまり酔ってないんじゃないんですか～」

「周りはみんな酔ったみたいだけど」

「無理してない～？」

木元は澄んだ目で一絵の目をのぞき込む

一絵はその純粋すぎる目に思わず目を背けた。

「大丈夫よ」

「じゃあ何でそんなにも辛そうにするの～」

木元は真っ直ぐな目をして一絵を追尾する。

「辛くなんか、、、無い、、よ？」

一絵はうめくように呟く。

「じゃあこっち見て」

一絵がおそるおそるふり返ると、優しいが瞳が彼女を見ていた

なんだか、それだけで泣きそうになった。

「もういいよ。今だけはいいよ」

優しい、優しい声した。だが一絵は、そんな優しい声に返す言葉は知らず、何か声に出そうとしても、うめき声しかあがらなかった。

うめき声が出ると、今まで積み上げたものが壊れそうな気がして、口をしぼませる。

すると涙が出てきた。

「貴方は今まで頑張ってきた。少しぐらい休んでも悪い事なんて無い」

優しい顔が近付いてくる。

「もう大丈夫、もう大丈夫です」

優しい何かは、

一絵をぎゅっと包み込んだ。

つーと、一絵の頬に涙が伝った。

何かが彼女から取れ、落ちていくように。

「姉貴、水ちょ～～ら～い♪」

――　そのとき背後で声がした

――――　瞬間！

『ブチッ』

そんな音が響き渡った、、、ような気がした。

次の瞬間、裕一は鬼を見た。

＊＊＊＊＊＊＊

「むにゃ、むにゃ、、先輩、、、」

和葉の幸せな寝言をよそに

裕一は、鬼にボロボロにされる。

裕一はすでに意識を失っているのだが、それでも鬼は攻撃する手を止めない。

「足んねー足んねーー！！！全然足んねーーーーー！！！！！！

鬼が闊歩する

獲物を求めるように

獲物をむしゃぶるうように！！

哀れ、裕一を引きずり、ゆっくり坂下を振り向いた。

「あ、、明日バスケの試合があるから見逃してくれないかな？」

坂下は完全にうわずった声で懇願した。が、

「幻想抱いて夢に沈め」

鬼は、エモノを見つけたような凄絶な笑みを浮かべた。

「ぎゃーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」

声はヤミを切り裂き、

こだましてから、、、

完全にかき消えた。

＊＊＊＊＊＊＊

すくっても

すくっても

掌から零れゆく雫

それでも私は止める事は出来ない

止めることは出来ない

＊＊＊＊＊＊＊

モノを作り変えるには、前のモノを壊す必要がある
そんな話を聞いた事がある。

でもそれは、
きっとなくす事じゃないって思う。

これから彼女がどう変わって行くにしても、
それはきっと、良い方向に違いない。

でも、物理的に壊すとか、それってただの八つ当たりだろ。

あの後、
一通り暴れると一絵は死んだように眠った。
木元は潰れた一絵と、和葉をベットに運んだ後、
坂下を連れて帰っていった。

祐一は放置されていたが、母親に無理やりたたき起こされひどく怒られた。なぜか首謀者は祐一と言う事になっていた。
痛む頭を抑えながら、片づけが済んだときには朝になっていた。
そして寝たくても、痛みと二日酔いのせいで眠れない状態に陥った。

「理不尽だ！」
そう叫んであと、頭に響いたのか祐一はうずくまったという。

ちなみに他の奴らもみんな、二日酔いになった。
しかも裕一を除く四人は、アパートに入ってからの事を覚えておらず、なんで二日酔いになっているのか分からないまま、無間地獄を彷徨った。

次の日が日曜日で本当に良かった。

坂下はバスケの試合があったが、まあ、、、よしとしよう。

後日、
木元がアパートを訪ねに来たとき、
一絵は、心が満たされるのを感じたという　　ｆｉｎ

（後書き）

＞ｂｒ＜＞ｂｒ＜気兼ねなく読めて、すっと読んですっと消えるような話を目指しました。
読んでくれてありがとうございます。

よければ、読んで思った事教えてください。感想、評価でもいいです。酷評は特に歓迎します。お願いします。

＊＊＊注意＊＊＊
これから先はぶっちゃけトークなので作品の世界観が崩れる恐れがあります。
＊＊＊注意＊＊＊

２番目に作った小説です。２００５年２月１１日に作りました。
三人称というものと、キレるシーンを書きたかったので、
途中に封入されている詩を元に話を作りました。
あと、携帯で見るという事を意識しました。

プロトたててたわりに全然駄目な作品ですね。当時はほんと若かった。
でも途中キャラが動き出すと言う事を初めて経験できた作品だし、
今の自分にプラスになっている事を祈ります。

オマケ

穂川君の母、籐子ちゃんは意外と悲しい経歴の持ち主。
昔は遊びまわってバツ２だが、今は結婚願望は無い。
親から虐待を受けた他、波乱万丈な人生を。おかげで粗暴な人柄に。
だが一絵姉ちゃんが就職してぐらいから、彼女は少し変わった。
愚痴を吐きながらも、なんだか幸せを感じるようになった。
今の夢は、孫の顔を見る事。夢の住人と関連あり。

穂川君は、人より出来るけどいつも貧乏くじを引きます。
典型的な「無能な上司につく、有能な部下」タイプ。
多分、一絵姉ちゃんがいるせいで、自然とハードルが高くなっていった結果だな。

一絵姉ちゃんは本当に努力家。
境遇からか若干ブラコン気味。といっても甘やかすのでなく、成長させようと画策する感じにかまいます。
ちなみに一絵姉ちゃんは、月曜に仕事に追われ、だいたいふっきります。
火曜には、バカ茂にプレゼント作戦を提案します。

木元君は一絵姉さんに一目惚れしています。
そのせいか木元君は酔って一絵姉さんに抱きついてしまいました。
でも、抱きついている間に酔いがさめてしまいました。
鍋を食べて気づくと、一絵姉さんを抱いているのです（記憶が飛んでいるため）。
急に自分のしたと事が恥ずかしくなり、頭を冷やしに外へ出ました。
そして、帰ってみると惨劇の傷痕があります。（一絵姉さんが暴れた事に、木元君は気づきません）
申し訳ない気持ちでいっぱいの木元君は、せめて女の子だけはベットに避難させました。
そして、明日大会のある坂下を、自分の親に頼んで車を出してもらいました。（祐一は埋もれてたため気づかなかった）
この話は後日、一絵姉さんに笑い話として聞かせる日がきます。

坂下は、バスケの試合に勝ちました。
彼は不思議と逆境に強い男なのです。
でもちゃんと木元君に感謝なさいよ。

バカ茂はイケメンだけあって、そこそこ努力家で、プライドが高く幼稚なところがあります。
そんな彼が唯一尊敬できた一絵姉さんと付き合いましたが、自尊心がそれを許さなかったのでしょう。難儀な奴です。
でも根は良い奴なので、年下の子に言い寄られて結婚すると思います。
小波様とはその後、プレゼント作戦を機に和解しました。
一絵姉ちゃんとは、表面上すぐに和解しましたが、
わだかまりが残り実際に会う事はありませんでした。でも小波様がわだかまりを壊します。

バカ茂は一絵姉ちゃんを憧れの目で、一絵姉ちゃんはバカ茂を結婚相手として見ていました。
両方とも好き同士だし、愛し合っていましたが、恋と言う感情とは違っていたと思います。
一絵姉ちゃんにぴったりな人は、隣に並んでくれる人でなく、
器の大きな受け止めてくれる人。そっと優しく見守ってくれる人なのかもしれません。

小波様はひまわりと言うよりは、元気いっぱいなハムスターだと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0575d/

零れゆく雫

2010年12月9日08時11分発行